

# 大学生における「自分の将来について考えること」の 認知的評価尺度の作成

－ 認知的側面，感情的側面からの評価による検討 －

石川 満佐育

---

## Development of a scale to measure Cognitive Appraisal of Thinking about the Future

ISHIKAWA, Masayasu

---

### 要旨

本研究の目的は、「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度—認知的側面版—（Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future -Cognitive aspect Version: CASTF-C）、「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度—感情的側面版—（Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future -Emotional aspect Version: CASTF-A）」の尺度を開発し、信頼性、妥当性の検討を行うことであった。四年制大学、短期大学の学生343名を対象に質問紙調査を行った。因子分析を行った結果から、脅威的認知、挑戦的認知の2因子計24項目からなるCASTF-Cが、脅威感情、挑戦感情の2因子計12項目からなるCASTF-Aが作成された。両尺度とも高い信頼性、妥当性を有していることが示された。

### キーワード

自分の将来について考えること、認知的評価、尺度開発、大学生・短期大学生

### Abstract

The aim of this study was to develop and verify the reliability and validity of two scales: the Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future-Cognitive aspect version: CASTF-C and the Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future-Emotional aspect version: CASTF-A. A questionnaire survey was conducted among 343 college. Factor analysis revealed that CASTF-C comprised a total of 24 items and two factors: challenging cognition and threatening cognition. CASTF-A, on the other hand, comprised a total of 12 items and three factors: challenging emotion and threatening emotion. The results also revealed that both scales had robust reliability and validity.

### Key words

thinking about the future, cognitive appraisal, scale development, university and junior college students

### 【問題と目的】

高等教育機関において、2011年度から教育課程に職業指導（キャリアガイダンス）を盛り込むことが義務化された。また、2012年にとりまとめられた「若年雇用戦略」において、初年次から教育活動の全体を通じて体系的・系統的なキャリア教育を実施する取組みを進めることが方針に示され（内閣府、2012）、多くの大学等では新入生向けのキャリア形成支援を積極的に展開している。文部科学省（2016）の調査によると、主として大学新入生を対象に作られた初年次教育において、将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラムを実施している大学数は、H21年度379大学（52%）からH26年度550大学（74%）へと増加している。こうした取組みが増加した背景

には、加澤・広岡（2007）が指摘しているように、若者の進路発達の未熟さの問題があり、大学時代に多くの学生が自らの進路について、積極的に考える態度を形成していないこと、などを挙げている。

大学等で初年次からのキャリア形成の支援が行われる一方、支援を受ける側の学生は、大学入学時から「自分の将来について考えること」を求められ、学生達は将来の生き方やキャリアについて自己と対峙する機会が確実に増えたとされる（中寫、2013）。青年期に自分の将来について考え進路を決断することは、誰しもが経験する人生の大きな節目とされる（東・安達、2003）。大学教職員の観点からみると、初年度からキャリア教育を実施することは、学生のキャリア形成支援のための当然の教育的方策

といえる。しかし、大学側がどのようなプログラムを提供しても、受講生本人が主体的に取り組んでいかない限り、大きな成果は期待できない。石橋・林・内藤(2015)は、キャリア教育支援においては、まずスタート時の段階で、生涯キャリアの問題は自分自身の責任であることを自覚し、社会的・職業的自立に向けて自ら学び、探索し、主体的にキャリア形成への行動を開始させるための働きかけが重要である、と述べている。主体的にキャリア形成への行動を開始させる働きかけを行うためには、スタート時の段階で学生が「自分の将来について考えること」をどのようにとらえているかを把握することが重要になると考えられる。

学生の視点からみると、「自分の将来について考えること」は重要であるという認識はありつつも、不安や負担感を喚起させるものにとらえている可能性がある。大学生を対象にしたリクルートキャリア(2013)の調査によると、大学卒業後の将来の進路について考えるときの気持ちを尋ねる問いに対して、「楽しい」の方に回答したものは23.5%で、「不安」の方に回答したものは58.3%であった。また「楽しい」と「不安」の対比を学年別にみると、学年の低い方が不安を高くいだく傾向が示されている。このことから、多くの学生は、将来について考える時、不安をはじめとしたネガティブな感情を抱いている可能性があり、心理学的観点からみると、学生にとって自分の将来について考えることは心理的ストレスの源(=ストレッサー)になっていると考えられる。実際、進路選択、職業意思決定は大学生にとって学生生活上の1, 2位に挙げられる課題や悩みであり、社会的状況と相まってかなりの期間にわたるストレス状況を招いている、とされる(西山, 2008)。また、大学生、短大生を対象に日常生活におけるストレッサーを測定する尺度において、将来の進路、職業について考えることに関する項目がストレッサーとして検討されている(久田・丹羽, 1987; 真船・鈴木・大塚, 2006; 宮里・松元, 2012; 森, 2015)。

将来について考えることをストレッサーとしてとらえている学生がいる一方で、楽しいと感じている学生もおり、その個人差をもたらす要因は、「自分の将来について考えること」をどのように評価するかが関連していると考えられる。そこで、本研究では、「自分の将来について考えること」の評価を検討する際の理論として、Lazarus & Folkman (1984)による心理的ストレス理論の「認知的評価」の概念を援用し、検討することを試みる。

認知的評価とは刺激状況に対する個人の主観的な評価のことであり、個人がその状況をストレスフルと評価することによって心理的ストレスが生じると考える(Lazarus & Folkman, 1984)。また、認知的評価には出来事と自分自身との利害関係を判断する一次的評価と、出来事をどの程度対処可能なのかを判断する二次的評価とがあり、このうち、一次的評価は、「害-喪失」および「脅威」の評価と、「挑戦」の評価とに大きく分類される。個人がストレスフルであると判断するのは、「害・損失」、「脅

威」、「挑戦」と評価する場合、「害・損失」はすでに何らかの損害を受けた場合になされる評価であるが、「脅威」と「挑戦」は、ストレス状況の前もしくはその予期において生じる評価とされる。Lazarus & Folkman (1984)によれば、「脅威」と「挑戦」の評価は、対処努力を要する点で共通するものの、それに伴う情動は「脅威」が恐怖や不安を、「挑戦」が熱意や興奮を表出するというように各々が対照的な特徴を持っているとされる(渋谷・西田・佐々木, 2008)。また、両概念は、連続体の両極とみなされるものではなく、同時に起こり得るものとされる。

本研究では、「自分の将来について考えること」の評価を検討する際、上記のうち、一次的評価に関する「脅威」と「挑戦」の評価に着目する。Lazarusらの理論では「脅威と挑戦の評価」が最も高くなるのは予期的段階であるとされており、「将来のことを考える」という本研究で取りあげる事象にも応用可能と考えられる。

従来の先行研究では、就職活動の際に経験する様々な事柄に対して、どの程度ストレスを感じたのかを検討した下村・木村(1997)、北見・茂木・森(2009)、就職活動そのものに対する不安を検討した松田・永作・新井(2010)などがあるが、本研究のように学生が「自分の将来について考えること」をどのように評価しているかについて直接的に扱った研究は見当たらない。また、先述したように大学生、短大生を対象にした研究において、「進路・就職」がストレッサーのひとつとして検討されているが、本研究のように「自分の将来について考えること」に焦点をあてているわけではなく、ストレッサーとして否定的評価に焦点を当てているため、認知的評価における「挑戦」の観点、つまり肯定的評価からの検討は行われていない。初年度からキャリア教育が積極的に行われている近年において、進路選択や就職活動を始める以前も含め「自分の将来について考えること」に焦点をあて、否定的側面からの検討だけでなく肯定的側面の加えた2側面から検討を行うことは、キャリア形成支援を実施するうえで学生の詳細な状態把握が可能になるという点で意義があると考えられる。

「自分の将来について考えること」の認知的評価を検討するにあたり、測定する尺度の開発が求められる。尺度の開発を行うことによって、実態把握が可能になるとともに、キャリア教育、キャリア支援の効果測定の指標として使用可能になると考えられる。これまでLazarus & Folkman (1984)の心理的ストレス理論に基づき「脅威」、「挑戦」に焦点をあてて認知的評価を測定する尺度はいくつかの研究で開発されているが、その測定方法は2つに大別される。1つは、渋谷他(2008)、野崎・子安(2012)のように、特定のストレス状況に対し、「脅威」、「挑戦」的な認知面に関する評定項目を複数用意し、直接的にその認知的評価の程度を測定する方法である。一方は、堤(1994)のように、「ストレス的」と認知する際に生じるとされる感情(脅威・挑戦・有害)の

程度を測定し、それらの感情の生起に先行するとされる認知的評価を捉えようとするものである。本研究では、この2つの測定方法に相当する認知的側面、感情的側面から「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度の作成を試みる。その上で、認知的側面、感情的側面のどちらの測定方法が実態把握を行う上で有効な方法なのかを検討することとする。

以上のことから、本研究では、「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度—認知的側面版—(Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future -Cognitive aspect Version: CASTF-C)」、ならびに「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度—感情的側面版—(Cognitive Appraisal Scale of Thinking about the Future -Emotional aspect Version: CASTF-A)」の尺度を開発し、信頼性、妥当性の検討を行うことを第一の目的とする。

CASTF-C、CASTF-Aの妥当性を検討するにあたり、両尺度と基準関連を示す指標として、ハーディネス尺度(堀越・堀越, 2008)、職業忌避的傾向尺度(古市・久尾, 2007)を用いる。

心理的ストレス理論に関する研究において、認知的評価は、様々なパーソナリティ特性の要因が関連していると考えられており、その1つにハーディネス(hardiness)があげられる(田中・桜井, 2006)。ハーディネスとは、高ストレス下で健康を保っている人々が持つ性格特性であり(Kobasa, 1979)、3つの要因(チャレンジ、コントロール、コミットメント)で構成されている。ストレスフルな状況において、コミットメントはたとえ困難な状況になろうともその場にいる周囲の人々や出来事と関わりを持ち続けることを意味する。コントロールは個人が出来事の推移に対して影響を与えられると信じ、またそのよう行動し続けようとすることである。チャレンジはストレス状況の中で成長の途を見出そうと努力し続けることである。Rhodewalt & Zone (1989)は、低ハーディネスの人は高ハーディネスの人に比べ、出来事をよりネガティブに評価すると報告した。したがって、本研究において作成される認知的評価に関する尺度との関連において、ハーディネスと挑戦に関する下位尺度との間には正の相関関係、脅威、有害に関する下位尺度との間には負の相関関係が予想される。

他方、自分の将来について考えることは、働くことの意識と直接関係すると考えられる。職業忌避的傾向とは、働くこと、あるいは職業を忌避する傾向とされ、職業忌避的傾向の強い者は、「仕事に就くこと」に対して否定的なイメージを抱いていることが示されている(古市・久尾, 2007)。したがって、本研究で作成される認知的評価に関する尺度との関連において、職業忌避的傾向と挑戦に関する下位尺度との間には負の相関関係、脅威、有害に関する下位尺度との間には正の相関関係が予想される。

また、自分の将来について考えることをどのように評価する

かは、学年別、進路希望状況によって異なることが予想される。したがって、本研究では、CASTF-C、CASTF-Aの得点が、学校別、進路希望状況別によって、どのように異なるかを検討することを第二の目的とする。

## 【方法】

(1)調査対象者：A県内の四年制大学1校に在籍する学生(以下：四大学生)186名、短期大学1校に在籍する学生(以下：短大生)180名、計366名であった<sup>1</sup>。

(2)調査時期：2014年1月下旬に実施した。

(3)手続き：質問紙調査を実施した。講義内に一斉配布し、回答を求めた。所用時間は10分程度であった。倫理的配慮として、調査実施前の対象学生に対し、①無記名で実施され、個人の回答が所属組織に報告されることや、結果が成績等に反映されることは無いこと、②調査結果は、研究のみに利用され学会発表や学術論文として公表されることがあるが、個人の回答がそのまま公表されることはないこと、③答えたくない質問がある場合は、その質問に答えなくてもかまわないこと、④回答を途中で辞めなくなった場合、やめることは可能で、そのことによる不利益は一切生じないこと、⑤データ入力後、回答用紙は終了後一定期間経過後に破棄されること、の旨を質問紙表紙に記載し、さらに口頭で説明を加えた。その上で、質問紙への回答をもって、調査参加の同意が得られたものと判断した。なお、倫理的配慮について、対象者が所属する機関から許可が得られている。

(4)調査内容：

①フェイスシート：性別は男性、女性の2件法で回答を求め、学年は、当該学年の数字の記入を求めた。

②進路希望状況：本多(2009)を参考に、現在の進路希望の状況について、「a.はっきりと決まっている、または、だいたい決めている進路がある。」(以下、aに回答したものを明確群とする)、「b.決めようとはしているが、まだ決まっていない。迷い中である。」(以下、bに回答したものを模索群とする)、「c.卒業後の進路については、具体的に考えていない。」(以下、cに回答したものを無関心群とする)の3件法で回答を求めた。

③「自分の将来について考えること」の認知的評価尺度—認知的側面版—(CASTF-C)：CASTF-Cの項目は、先行研究(野崎・子安, 2013; 岡安, 1992; 渋谷他, 2008)を参考に、脅威的認知12項目、挑戦的認知12項目、計24項目を独自に作成した。作成された24項目について、キャリア支援に関わる大学教員2名、事務職員1名によって項目内容を検討してもらい、内容的妥当

<sup>1</sup> 対象者が在籍する四年制大学、短期大学は総合大学であり、卒業生の進路は多種多様である。対象となった学生は、心理学系科目の受講生である。

性を確認した。教示は、「以下の項目で示される内容について、今現在のあなたにどれくらいあてはまりますか？それぞれの項目について、1～6（『全くあてはまらない』～『かなりあてはまる』）の6つの中で、あなたに一番当てはまるものを1つだけ選んで○をつけてください。全ての項目の主語は、『卒業後の自分の進路を決定するために、自分の将来の進路について考えることは、』になります。」とし、「全然あてはまらない（1点）」～「かなりあてはまる（6点）」の6件法で回答を求めた。

④「自分の将来について考えることの認知的評価尺度—感情的側面版—（CASTF-A）：堤(1994)による臨床実習用ストレス認知的評価尺度の項目をそのまま用い、教示を変更して使用した<sup>2</sup>。原尺度は挑戦感情（6項目）、脅威感情（6項目）、有害感情（5項目）の計17項目から構成される。尺度の内容について、キャリア支援に関わる大学教員2名、事務職員1名によって項目内容、教示を検討してもらい、内容的妥当性を確認した。教示は、「以下に、学生が将来の進路について考える時に経験するであろうと予測される感情が書いてあります。それぞれ項目の感情状態について、現在どの程度感じているかを、1～5（『全然違う』～『全くそうだ』）の5つの中で、最も当てはまると思われる番号を1つだけ選んで○をつけてください。」とし、「全然違う（1点）」～「全くそうだ（5点）」の5件法で回答を求めた。

⑤ハーディネス尺度：堀越・堀越(2008)によるハーディネス尺度を用いた。本尺度は、3下位尺度（チャレンジ、コントロール、コミットメント）、各5項目の計15項目で構成される。「あてはまらない（1点）」～「あてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

⑥職業忌避的傾向尺度：古市・久尾(2007)による「職業忌避的傾向尺度」、10項目を用いた。「いいえ（1点）」～「はい（5点）」の5件法で回答を求めた。

## 【結果】

### （1）分析対象者

回収された調査用紙から、欠損値を含むデータを全て除外した。その結果、四大生167名（1年男性12名、1年女性7名、2年男性36名、2年女性42名、3年男性42名、3年女性28名）、短大生176名（1年男性5名、1年女性171名）、計343名を分析対象者とした（有効回答率93.7%）。

<sup>2</sup> 堤(1994)は臨床実習におけるストレスの認知的評価の測定を行っている。本研究の「将来について考えること」とは内容が異なるが、Lazarus & Folkman (1984)の理論的背景をふまえて項目が作成されており、ストレスをもたらす出来事に対する感情的反応を測定しているという点で、項目を利用することは可能と判断した。また、問題と目的で述べた挑戦、脅威の他に、原尺度と同様に有害感情の下位尺度をCASTF-Aの尺度に加えた理由として、就職活動等を経験しうまくいかないことが続いたり、学年があがるにつれ取り組まなければならない差し迫った課題と認識した場合などは、「自分の将来について考えること」について有害感情(ex. うんざりだ、腹立たしい)を生起させる可能性があり、その指標として使用可能と考えた。

分析には、SPSS ver. 22.0を用いた。

### （2）CASTF-Cの因子構造の検討

まず、独自作成した24項目に対し項目分析を行った結果、どの項目においても天井効果・床効果は認められなかった。次に、最尤法による因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況（初期固有値の推移：7.46, 6.13, 1.20, 0.86, …）ならびに因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して、最尤法、Promax回転による因子分析を行った結果、Table 1に示す因子パターン行列が得られた。第1因子には脅威的認知に関する項目がまとまって因子を構成したため、「脅威的認知」と命名とした。第2因子には挑戦的認知に関する項目がまとまって因子を構成したため、「挑戦的認知」と命名した。因子間相関は、.10であった。

Table 1 CASTF-Cの因子分析の結果 (Promax回転後, N=343)

No	F1	F2	M	SD
<b>F1 脅威的認知</b>				
19 自分自身を疲れさせるものになると思う。	.84	.02	4.09	(1.26)
15 自分にとってつらい、苦痛なことになると思う。	.83	.05	3.91	(1.31)
17 自分にとって避けたいものになると思う。	.77	-.03	3.60	(1.39)
7 自分の余裕を奪うものになると思う。	.75	.04	4.14	(1.17)
3 自分にとって重荷や負担になると思う。	.75	.01	3.93	(1.20)
5 自分にとって面倒なことになると思う。	.75	-.11	3.47	(1.30)
11 自分自身をネガティブにさせるものになると思う。	.75	-.01	3.70	(1.32)
21 自分の自由な時間を奪うものになると思う。	.73	.05	4.03	(1.25)
23 自分の活動を制限するものになると思う。	.72	.00	3.82	(1.22)
9 自分の生活に支障をきたすものになると思う。	.71	-.09	3.16	(1.26)
13 自分の自己評価を低めるものになると思う。	.59	-.00	3.03	(1.20)
1 自分自身を不安定にさせるものになると思う。	.59	.07	3.72	(1.41)
<b>F2 挑戦的認知</b>				
16 自分の新たな一面を発見する機会になると思う。	-.10	.83	4.39	(1.06)
18 これまでの自分にはない知識を身につける機会になると思う。	.03	.81	4.47	(1.09)
6 自分の個性をみがく機会になると思う。	-.04	.79	4.22	(1.10)
12 これまでの自分にはない能力を身につける機会になると思う。	-.06	.74	4.10	(1.10)
14 自分とはどんな人間かを明確にする機会になると思う。	.07	.73	4.59	(1.05)
22 自分の価値観や人生観を見直す機会になると思う。	.02	.71	4.60	(1.01)
20 自分の短所、欠点を改善する機会になると思う。	.13	.69	4.45	(1.04)
8 新鮮な刺激を得ることができる機会になると思う。	-.04	.69	4.31	(1.11)
24 精神的な強さを身につける機会になると思う。	.08	.68	4.57	(1.11)
10 ありのままの自分自身を受け入れるための機会になると思う。	-.04	.68	4.08	(1.12)
4 これまでの生き方を見直す機会になると思う。	.12	.63	4.56	(1.08)
2 自分への自信を高める機会になると思う。	-.19	.51	3.81	(1.21)
因子間相関			.10	

### （3）CASTF-Aの因子構造の検討

まず、17項目に対し項目分析を行った結果、2項目（No1, No7）に天井効果、4項目（No3, No11, No13, No16）に床効果が認められた。天井効果2項目については、効果測定の指標として用いた場合、得点の減少が期待される重要な項目と考え、除外せずに、今後の分析を行うこととした。一方、床効果がみられた4項目は原尺度における有害感情に含まれる項目であった。原尺度による有害感情の5項目のうち4項目で床効果がみられた点で、「将来について考えること」における有害感情の項目としては適切ではなかった可能性が否めないため、今後の分析では、有害感情の5項目を除外し、挑戦感情、脅威感情の項目

のみを分析対象とすることとした<sup>3</sup>。

12項目に対して最尤法による因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況(初期固有値の推移: 4.12, 3.43, .890, ...)ならびに因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると判断した。そこで再度2因子を仮定して、最尤法, Promax回転による因子分析を行った結果, Table 2に示す因子パターン行列が得られた。第1因子には挑戦感情を示す項目がまとまって因子を構成したため、「挑戦感情」と命名とした。第2因子には脅威感情を示す項目がまとまって因子を構成したため、「脅威感情」と命名とした。因子間相関は、-.09であった。

Table 2 CASTF-Aの因子分析の結果

(Promax回転後, N=343)				
No 項目	F1	F2	M	SD
<b>F1 挑戦感情</b>				
10 情熱がある	.86	.07	2.90	(1.09)
8 意欲がある	.81	.05	3.40	(1.06)
2 燃えている	.75	.08	2.79	(1.08)
6 希望を持っている	.72	-.10	3.01	(1.13)
17 ワクワクしている	.68	-.13	2.56	(1.21)
14 勇気が出てくる	.64	-.00	2.05	(1.04)
<b>F2 脅威感情</b>				
7 不安だ	-.01	.80	4.10	(1.10)
15 びくびくしている	-.03	.76	2.97	(1.37)
1 心配だ	-.03	.75	4.08	(1.04)
4 恐ろしい	-.01	.74	3.02	(1.37)
12 気がかりだ	.04	.71	3.49	(1.28)
9 圧倒されている	.03	.66	2.91	(1.29)
因子間相関 F1 -.09				

(4) 信頼性, 妥当性の検討

CASTF-C, CASTF-Aは、因子分析の結果に基づき得点化を行った。また、ハーディネス尺度、職業忌避的傾向尺度は、先行研究に基づき得点化を行った<sup>4</sup>。なお、各下位尺度の得点は、合計点を項目数で割った値を使用した。

CASTF-C, CASTF-Aの各下位尺度の記述統計量,  $\alpha$ 係数ならびに各変数の相関係数の結果をTable 3に示す。CASTF-Cの各下位尺度の度数分布について、理論的中央値3.5点を基準に3.5点未満, 3.5点以上の割合をみると、脅威的認知では135名(39.24%), 209名(60.76%), 挑戦的認知では34名(9.98%), 310名(90.12%)となった。CASTF-Aの各尺度の度数分布について、理論的中央値3.0点を基準に3.0点未満, 3.0点以上の割合をみると、脅威感情では105名(30.52%), 239名(69.48%), 挑戦感情では190名(55.23%), 154名(44.77%)となった。

信頼性の検討のために $\alpha$ 係数を算出したところ、.88~.93の値が得られ、満足し得る内的一貫性が認められた。また、CASTF-C, CASTF-Aの各変数間の相関係数を検討したところ、CASTF-C, CASTF-Aともに脅威と挑戦との間に有意な相関は示されなかった( $r=.09, n.s.; r=-.08, n.s.$ )。

<sup>3</sup> 有害感情の5項目で下位尺度を構成したところM=1.96, SD=0.89であった。得点分布を検討したところ、理論的中央値3.0点を基準に3.0点未満, 3.0点以上の割合は、有害感情では296名(86.05%), 48名(13.95%)で、著しい分布の偏りがみられると判断した。下位尺度の得点分布からも本研究では用いた有害感情の項目は適切ではなかった可能性があり、分析からは除外することとした。

CASTF-C, CASTF-Aの基準関連妥当性を検証するために、基準変数との相関係数を算出した(Table 3)。ハーディネス尺度において、脅威的認知、脅威感情との間に有意な弱い負の相関係数が得られ、挑戦的認知、挑戦感情と有意な弱い~中程度の正の相関係数が得られた。職業忌避的傾向尺度において、脅威的認知、脅威感情と有意な弱い~中程度の正の相関係数が得られ、挑戦的認知、挑戦感情と有意な弱い~中程度の負の相関係数が得られた。

Table 3 各変数の記述統計量,  $\alpha$ 係数ならびに各変数の相関係数

(N=343)										
領域	下位尺度	M	SD	$\alpha$	歪度	尖度	①	②	③	④
CASTF-C	①脅威的認知	3.72	(0.97)	.93	-0.10	0.00	.09	.58	-.26	
	②挑戦的認知	4.35	(0.80)	.92	-1.10	2.77		.10	.45	
	③脅威感情	3.43	(0.98)	.88	-0.22	-0.82				-.08
CASTF-A	④挑戦感情	2.78	(0.88)	.88	0.15	-0.43				.ns
	チャレンジ	3.07	(0.53)	.76			-.18	.25	-.11	.36
ハーディネス	コントロール	2.69	(0.65)	.83			-.20	.23	-.11	.38
	コミットメント	2.86	(0.55)	.61			-.19	.09	-.10	.13
職業忌避的傾向		2.81	(0.70)	.81			.56	-.20	.19	-.39

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: 有意差なし

(5) 学校種別, 学年別, 進路希望状況別にみたCASTF-C, CASTF-Aにおける下位尺度得点の比較

学校種別の検討を行うにあたり、サンプルの属性を等質にした比較を行うために、次年度に卒業年次生となる四大3年生70名と短大1年生176名のサンプルを対象に分析を行った。四大生, 短大生を独立変数, CASTF-C, CASTF-Aにおける下位尺度得点を従属変数としてt検定を行った結果、全ての変数において有意な差がみられた(Table 4)。脅威的認知, 脅威感情では、短大1年生が四大3年生よりも得点が高かった。一方、挑戦的認知, 挑戦的感情では、四大3年生が短大1年生よりも得点が高かった。効果量を算出したところ、0.34~0.59の値が得られ、効果量小~中程度であった<sup>5</sup>。

Table 4 学校種別による各下位尺度の得点比較

領域	下位尺度	四大生3年 n=70		短大生1年 n=176		t 値	d
		M	SD	M	SD		
CASTF-C	脅威的認知	3.47	(0.96)	3.96	(0.94)	3.68***	0.52
	挑戦的認知	4.57	(0.68)	4.32	(0.78)	-2.39*	0.34
CASTF-A	脅威感情	3.16	(1.01)	3.67	(0.92)	3.82***	0.54
	挑戦感情	3.21	(0.85)	2.70	(0.85)	-4.20***	0.59

\*\*\*:  $p < .001$ , \*:  $p < .05$

学年別の比較を行うにあたり、短大生は1年生のみであったため、他の要因を可能な限り排除した学年差を検討するために四大生167名を対象に分析を行った。学年を独立変数,

<sup>4</sup> ハーディネス尺度におけるコミットメントについては、先行研究と同様5項目で下位尺度を構成したが、 $\alpha$ 係数の値が.48と低かったため、 $\alpha$ 係数を低めている1項目を削除し、4項目で下位尺度を構成した。

<sup>5</sup> 効果量の目安は、水本・竹内(2008)を参考にした。

CASTF-C, CASTF-Aにおける下位尺度得点を従属変数として一要因分散分析を行った結果, 挑戦的認知, 挑戦的感情において有意な差がみられた(Table 5)。Tukey法による多重比較を行った結果, 挑戦的認知では, 3年生の得点が2年生の得点よりも高かった。挑戦感情では, 3年生の得点が1, 2年生の得点よりも高かった。効果量を算出したところ, 0.05(効果量小), 0.10(効果量中)の値が得られた。脅威的認知, 脅威感情においては, 有意な差は示されなかった。

Table 5 学年別による各下位尺度の得点の比較

領域	下位尺度	学年	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> 値	$\eta^2$	多重比較
CASTF-C	脅威的認知	1年	19	3.18	(0.76)	1.28 <i>n.s.</i>	0.02	
		2年	78	3.56	(0.89)			
		3年	70	3.47	(0.96)			
	挑戦的認知	1年	19	4.31	(0.48)			
		2年	78	4.28	(0.88)			
		3年	70	4.57	(0.68)			
CASTF-A	脅威感情	1年	19	2.98	(0.91)	0.67 <i>n.s.</i>	0.01	
		2年	78	3.26	(0.94)			
		3年	70	3.16	(1.01)			
	挑戦感情	1年	19	2.53	(0.82)			
		2年	78	2.68	(0.85)			
		3年	70	3.21	(0.85)			

\*\*\*:  $p < .001$ , \*:  $p < .05$ , *n.s.*: 有意差なし

進路希望状況別の比較を行うために, 進路希望状況の質問について, 「a.はっきりと決まっている, または, だいたい決めている進路がある。」に回答した211名を明確群とし, 「b.決めようとはしているが, まだ決まっていない。迷い中である。」に回答した118名, 「c.卒業後の進路については, 具体的に考えていない。」に回答した14名を合算し, 計132名を不明確群とした。明確群, 不明確群を独立変数, CASTF-C, CASTF-Aにおける下位尺度得点を従属変数として *t* 検定を行った。その結果, 全ての変数において有意な差がみられた(Table 6)。脅威的認知, 脅威感情では, 不明確群が明確群よりも得点が高かった。一方, 挑戦的認知, 挑戦的感情では, 明確群が不明確群よりも得点が高かった。効果量を算出したところ, 0.33~0.71の値が得られ, 効果量小~中程度であった。

Table 6 進路希望状況別による各下位尺度の得点比較

領域	下位尺度	明確群 <i>n</i> =211		不明確群 <i>n</i> =132		<i>t</i> 値	<i>d</i>
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
CASTF-C	脅威的認知	3.59	(0.96)	3.95	(0.91)	-3.47**	0.38
	挑戦的認知	4.45	(0.68)	4.20	(0.89)	2.77**	0.33
CASTF-A	脅威感情	3.31	(0.95)	3.64	(0.98)	-3.06**	0.34
	挑戦感情	3.01	(0.81)	2.43	(0.84)	6.37***	0.71

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$

## 【考察】

本研究の目的は, 「自分の将来について考えることの認知的評価尺度—認知的側面版—(CASTF-C)」と「自分の将来について考えることの認知的評価尺度—感情的側面版—(CASTF-A)」の尺度を開発し, 信頼性, 妥当性の検討を行うことであった。また, CASTF-C, CASTF-Aの得点が, 学年別, 進路希望状況別によって, どのように異なるかを検討することであった。

CASTF-Cの因子構造を検討するために, 最尤法, Promax回転による因子分析を行った結果, 脅威的認知, 挑戦的認知の2因子, 計24項目からなる尺度が作成された。CASTF-Aの因子構造を検討するために, 最尤法, Promax回転による因子分析を行った結果, 脅威感情, 挑戦感情の2因子, 計12項目からなる尺度が作成された。CASTF-Aの因子構造は, 堤(1994)とは異なり, 有害感情を除く2因子からなる尺度となった。

次に, 信頼性を内的一貫性から検討した結果,  $\alpha$  係数は.88~.93の値が得られ, 満足し得る内的一貫性が認められた。また, 基準関連尺度との相関係数を算出した結果, 一部低い値であったものの, 概ねそれぞれ予想された正, あるいは負の相関関係が示され, CASTF-C, CASTF-Aは一定の基準関連妥当性を有していると判断された。

CASTF-C, CASTF-Aの各変数間の相関係数について, CASTF-C, CASTF-Aともに脅威と挑戦を示す下位尺度との間に有意な相関は示されなかった。この結果は, 両概念は連続体の両極とみなされるものではなく同時に起こり得るものとされる, というLazarus & Folkman (1984)の指摘と一致する。したがって, 脅威と挑戦の認知, 感情は, 個人の中に独立して生起していることが示唆された。先述したようにリクルートキャリア(2013)の調査では, 「楽しい」, 「不安」を連続体の両極としてとらえられているが, 本研究の結果から, 否定的な評価と肯定的な評価を独立させて検討する必要性が示唆されたといえる。独立に検討することのメリットとして, 両方の得点が高い学生, 一方のみが高い学生というように類型化が可能になり, その類型によって進路選択, 就職活動への取り組み状況などを詳細に検討することができるようになる。今後, 類型化に基づいた検討が必要になるが, この結果は, キャリア支援を行う際にも重要な知見になりえると考えられる。

一方で類型化を行うにあたり留意点も浮き彫りになったといえる。CASTF-C, CASTF-Aにおける下位尺度の得点分布をみると, 挑戦的認知において大きな分布の偏りがみられ, 多くの学生が「あてはまる」側に回答していることが示されたが, 一方の挑戦感情は理論的中央値よりも低い値となっている。つまり, 挑戦的に考えようとしてはいるものの, 実際の感情的反応としては, 挑戦的に捉えられていないことがうかがえる。平均値, あるいは理論的中央値による高低の分類を行うにあたり, 本研究の挑戦的認知の得点分布からは意味のある類型は見いだせないことが示唆された。したがって, 今後類型化による検討を行う際には, CASTF-Aを使用したほうが適切ではないかと考えられる。

次に学校種別, 学年別, 進路希望状況別によるCASTF-C, CASTF-Aの下位尺度得点の比較の結果について述べる。なお, 本研究では各属性のサンプルに偏りがみられ, 一部のサンプルを用いて分析を行った。今後は性別, 学年について一定のサン

ブル数を確保したうえで検討を行うことが必要であろう。

学校種別の四大3年生と短大1年生のサンプルによるCASTF-C、CASTF-Aの下位尺度得点の比較を行うために $t$ 検定を行った結果、脅威的認知、脅威感情では、短大1年生が四大3年生よりも得点が高く、挑戦的認知、挑戦的感情では、四大3年生が短大1年生よりも得点が高かった。つまり、短大1年生のほうが自分の将来について考えることをより否定的に評価していることが示された。この結果は、四年制大学と短期大学の卒業年次生における職業的不安の得点を比較し、職業的不安のすべての下位尺度において、四大生より短大生の方が不安が高かったことを示した赤田・若槻(2011)の結果と類似している。入学してから卒業までが2年と短い短大生は、限られた期間で職業の選択を迫られるため(東・安達, 2003)、四大生よりも負担感やプレッシャーを強く感じているために、脅威と評価する傾向が高くなると考えられる。

学年別の比較を行うために四大生のサンプルを用いて、一要因分散分析を行った結果、挑戦的認知では、3年生の得点が2年生の得点よりも高く、挑戦感情では、3年生の得点が1, 2年生の得点よりも高かった。1年生のサンプル数が少ないため慎重に解釈を行う必要があるが、この結果について、挑戦と評価する傾向は学年があがるにつれて高くなることが示唆された。1年生は実際の進路選択活動を起こすまでの時間にも余裕があることから、進路選択を現実的に捉えられていない可能性も考えられるが、3年生になると実際に就職活動に取り組み始めている学生も多くなり、将来について意欲的、積極的に考えようとする傾向が高くなるのかもしれない。

進路希望状況別の比較を行うために、対象者を明確群、不明確群に分類し、 $t$ 検定を行った結果、脅威的認知、脅威感情では、不明確群が明確群よりも得点が高かった。将来の進路希望が明確でない学生は、自分の将来について考えることを脅威と評価していることが示された。一方、挑戦的認知、挑戦的感情では、明確群が不明確群よりも得点が高かった。将来の進路希望が明確な学生は、自分の将来について考えることを挑戦と評価していることが示された。自分の将来について考えることを挑戦と評価することが早期の進路希望の決定に影響を与えるのか、逆に早期の進路希望の決定が、挑戦的な評価に影響を与えるのかの因果関係については、本研究では十分な検討を行っていないため今後検討が必要であると考えられる。

CASTF-C、CASTF-Aが作成されたことにより、認知的評価という観点から、肯定的評価、否定的評価の両側面を測定することが可能になった。本研究の結果から、挑戦と評価するか、脅威と評価するかには個人差があることが示され、直接的な検討は行っていないものの、挑戦的な評価を行うことが進路選択過程において有効である可能性が示唆された。自分の将来について考えることを肯定的と評価できるようになることが、進路

選択、就職活動に成功するかを直接規定するわけではないかもしれない。実際には、意思決定スキル、就職活動を実際に行っていくためにスキルなど具体的なスキルの獲得に向けた支援や、近年多くのキャリア研究の中で焦点が当てられている進路選択効力感を高める支援が必要となる。しかし、本研究の結果、「自分の将来について考えること」を肯定的に評価できるようにする、あるいはたとえ否定的な評価であってもそれを乗り越えていけるようにする支援から始めることの重要性が改めて示されたと考えられる。

今後の課題について、心理的ストレス理論の観点、キャリア支援の観点、発達の観点の3点から述べる。

心理的ストレス理論の観点について、本研究で作成されたCASTF-C、CASTF-Aは、Lazarus & Folkman (1984)の理論的背景をもとに先行研究に参考にしたうえで作成された。したがって、認知的評価単独で検討を進めるだけではなく、心理的ストレス理論に基づいた検討が必要と考えられる。CASTF-C、CASTF-Aは認知的評価の一次的評価のみを測定するものであって、二次的評価である対処可能性については検討されていない。今後は二次的評価を含めた認知的評価を測定可能な尺度を作成することが考えられる。また、コーピングの観点から、将来について考えることにどのような対処を行うことがストレス反応の軽減に寄与するのかを検討することもCASTF-C、CASTF-Aの有効性を示すために必要と考えられる。

キャリア支援の観点について、本研究の成果をふまえた今後の課題として、①脅威、挑戦の両側面から学生を4群(挑戦高脅威高群、挑戦高脅威低群、挑戦低脅威高群、挑戦低脅威低群)に分類し、それぞれの群の特徴を検討すること、②縦断研究を用いて、認知的評価がどのように変化するかを詳細に検討すること、③認知的評価が実際の進路探索行動や就職活動、あるいは精神的健康や大学生生活の適応にどのような影響を与えるかを検討すること、が挙げられる。上記の検討を通して、自分の将来について考えることにストレスを感じている学生のタイプに応じた具体的な支援策を考案していくことが求められる。

発達の観点について、自分の将来について考えることは大学に在籍する間で終了するのではなく、生涯を通して継続していくことが求められる。この点で、キャリア形成支援の初期段階において、自分の将来について考えることを肯定的に評価できるようにする支援から始めることが重要な支援の1つと考えられる。キャリア教育は高等教育段階だけでなく、小学校段階から実施される。本研究では、大学生を対象に検討を行ってきたが、自分の将来について考えることを肯定的に評価できるようになるためには、小学校段階からの具体的な支援案を検討することが必要である。したがって、本研究の結果を基に小学生、中学生にも回答可能な尺度作成を行い、小学校段階から発達の視点もふまえた検討を行う必要があると考えられる。

## 【引用文献】

- 赤田 太郎・岩槻 優美子 (2011). 職業的不安に対する大学・短期大学のキャリア教育の現状と課題：ソーシャルサポートと自己効力が与える影響から 龍谷紀要, 33, 77-88.
- 東 清和・安達 智子(編) (2003). 大学生の職業意識の発達—最近の調査データ分析から 学文社
- Folkman, S & Lazarus, R S. (1982). If it changes it must be a process : Study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 150-170.
- 古市 裕一・久尾 敏子 (2007). 青年の職業忌避的傾向と就業不安および進路決定効力感 岡山大学教育学部研究集録, 135, 1-7.
- 久田 満・丹羽 郁夫 (1987). 大学生の生活ストレス測定に関する研究—大学生用生活体験尺度の作成— 慶応大学社会学研究科紀要, 27, 45-55.
- 堀越 あゆみ・堀越 勝 (2008). ハーディネス尺度の構造およびその精神的健康との関連：中高年と大学生を対象として順天堂医学, 54, 192-199.
- 本多 陽子 (2009). 大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係 青年心理学研究, 20, 87-100.
- 石橋 里美・林 潔・内藤 哲雄 (2015). キャリア教育からみた大学生のキャリア目標設定行動に及ぼす要因分析 東京未来大学研究紀要, 8, 13-25.
- 加澤 恒雄・広岡 義之 (2007). 新しい生徒指導進路指導——理論と実践——ミネルヴァ書房
- Kobasa, S. C. (1979). Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1-11.
- 北見 由奈・茂木 俊彦・森 和代 (2009). 大学生の就職活動ストレスに関する研究——評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響—— 学校メンタルヘルス, 12, 43-50.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- 真船 浩介・鈴木 綾子・大塚 泰正 (2006). 大学生におけるストレスの特徴：認知的評定、及び心理的ストレス反応との関連の検討 学校メンタルヘルス, 9, 57-63.
- 松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎 (2010). 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響——コーピングに注目して—— 心理学研究, 80, 512-519.
- 宮里 新之介・松元 理恵子 (2012). 女子短期大学生の抑うつ感と学生生活上の多様なストレスとの関連 鹿児島女子短期大学紀要, 47, 175-185.
- 水本 篤・竹内 理 (2008). 研究論文における効果量の報告について——基礎的概念と注意点—— 英語教育研究, 31, 57-66.
- 文部科学省 (2016). 平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要) Retrieved from [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/icsFiles/afidfile/2017/02/17/1380019\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/icsFiles/afidfile/2017/02/17/1380019_1.pdf) (2017年8月21日)
- 森 俊之 (2015). 大学生のストレス、ストレスラー、対処方略—大学生と短期大学生の学年比較— 仁愛大学研究紀要人間学部篇, 14, 15-24.
- 内閣府 (2012). 若年雇用戦略 Retrieved from [http://www.5.cao.go.jp/keizai1/wakamo\\_no/sennryaku.pdf](http://www.5.cao.go.jp/keizai1/wakamo_no/sennryaku.pdf) (2017年8月25日)
- 中島 剛 (2013). 進路選択における潜在意識の研究：大学生の自由記述回答の分析 千葉経済論叢, 48, 23-39.
- 西山 薫 (2008). 就職不安とプロアクティブパーソナリティ特性および自己効力に関する研究, 人間福祉研究, 6, 137-148.
- 野崎 優樹・子安 増生 (2012). 大学入試に対する認知的評価とストレス対処が情動知能の成長感に及ぼす効果 パーソナリティ研究, 21 (3), 231-243.
- 岡安 孝弘 (1992). 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用 健康心理学研究, 5, 12-23.
- リクルートキャリア (2013). 大学生の将来イメージ——大学生価値意識調査より—— Retrieved from [https://www.recruitcareer.co.jp/news/2013/04/30/20130430\\_2.pdf](https://www.recruitcareer.co.jp/news/2013/04/30/20130430_2.pdf) (2017年8月21日)
- Rhodewalt, R., & Zone, J. B. (1989). Appraisal of life change, depression, and illness in hardy and nonhardy women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 81-88.
- 渋谷 崇行・西田 保・佐々木 万丈 (2008). 高校運動部員の部活動ストレスに対する認知的評価尺度の再構成 体育学研究, 53, 147-158.
- 下村 英雄・木村 周 (1997). 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討 進路指導研究, 18, 9-16.
- 田中 秀明・桜井 茂男 (2006). 大学生におけるハーディネスとストレスラーおよびストレス反応との関係 鹿児島女子短期大学紀要, 41, 153-164.
- 堤 由美子 (1994). 臨床実習用ストレス質問紙(CSQ)の日本語版の開発 日本看護研究学会雑誌, 17, 17-26.